となりの医療さん

生殖医療大きな福音

ASKAレディースクリニック院長

① 中山雅博さん

私の医院では、産婦人科と言っても分娩を取り扱わず、生殖医療（不妊症と不育症）に特化した診療を行っています。生殖医療という言葉はあまりなじみがないと思いますが、一昔前の不妊治療と言えば、産婦人科外来の片隅でひっそりと行われている程度でした。

しかし、1978年の世界初の体外受精による出生の報告を皮切りに、89年には重症男性不妊に対して卵子に精子を直接注入する顕微授精も成功を収め、その後も生殖医療は飛躍的な発展を遂げることになります。近年では、受精卵に多く見られる染色体や遺伝子異常を妊娠する前に調べる着床前診断の技術も実用化され、不育症や一部の遺伝性疾患での臨床応用が期待されています。また近年注目されている再生医療も、培養した受精卵から得られた万能細胞の一種、ES細胞が研究の発端となりました。

高度生殖医療の進歩により、従来は妊娠が困難とされた夫婦に大きな福音がもたらされ、この領域はいまや産婦人科診療のなかで一つの独立した分野として確立し、専門医院による治療が主流になりつつあります。

さて、現在の日本では婚姻夫婦の4組に1組がいわゆる「できちゃった婚」とされる一方で、10組に1組の割合で不妊に悩むカップルがいます。不妊症には、妊娠歴のない「原発性不妊」と妊娠歴のある「続発性不妊」とがありますが、意外にも1人目を自然に授かったにもかかわらず、「2人目不妊」の方は多く、来院される患者さんの18%を占めています。

またかつては不妊は一方的に女性側の責任とされてきましたが、いまや不妊原因のおよそ40%が男性因子で、ほぼ同等と言われています。男性にとっては尻込みしがちな産婦人科ですが、当院でも週末には多くのご夫婦が来院されています。

厚生労働省の人口動態統計によると、日本の出生数は第2次ベビーブームの200万人以降減少を続け、さらに2005年からは死亡数が出生数を上回り、人口は減少に転じています。世界一の長寿がもたらした老齢化と、その一方で急速に進む少子化はいまだかつて経験したことのない危機であり、社会の仕組みにひずみをもたらしかねません。その意味で一人でも多くのご夫婦が子宝に恵まれるよう、日々の診療に励むことが我々の使命でありましょう。

とは言え、少子化問題は不妊治療だけで解消できることではありません。まずは次世代を産み、安心して育てることができる社会環境の実現があってこそではないでしょうか。

次回は、私たちを取り巻く生活環境やライフスタイルの変化がもたらした不妊について、お話しさせていただきます。

（この項つづく）

92年に県立医科大卒業後、新生児集中治療部助手、産婦人科学教室助手を歴任し、付属病院で不妊治療に従事。大阪府立呼吸器アレルギーセンターの診療主任を経て、03年からASKAレディースクリニック院長。日本生殖医学会、日本遺伝カウンセリング学会会員。